
シャングリラ

月明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャングリラ

【Nコード】

N4071Y

【作者名】

月明

【あらすじ】

あなたは、あなたの街の怪談を知っているだろうか？ どこからとも流れてどんどん人から人へ伝染して行くうわさ。触れなければ、ただの日常の1コマで終わるが、単なる好奇心から怪談に関わり始めると最後・・・日常の崩壊を意味してしまうのかもしれない。

プロローグ

怪談 それは、何処にでもありそうな触れなければ日常の一部としてもありふれている。あなたの住む街にはどのような怪談があるのだろうか？ そして、怪談に触れてしまったらどのような事になるのだろうか・・・？

キーンコーンカーンコーン・・・

「ねえねえ、葵ちゃん！」

放課後、帰ろうとして廊下に出た私は不意に肩を叩かれて後ろを振り返る。この子は同じクラスの麻里子ちゃんだ。

「どうしたの？」

私は早く帰りたい気持ちもあつたが、親友の麻里子ちゃんを無視するような真似はもちろんしないので、聞いてみた。私が訊ねると麻里子ちゃんは少し興奮気味の声でこう言ったのだ。

「今度の日曜日に市立美術館に行かない？ 淳介くんや拓也くんも居るんだよ！」

「へえ・・・私、美術にはあまり興味が無いんだけど・・・美術に丸つきり縁が無さそうな拓也が行くとすると、何かあるの？」

拓也とは、勉強は苦手だが体育や遊びが好きと言った俗に言う「わんぱく少年」である。無論、アウトドア系の彼の視点から見ると「美術」なんてのはただの落書き同然であろう。そんな彼も行くというのだ。きつと何かあるに違いないと私は思った。

「うん！ たしか・・・淳介君が言ってただけで、美術館で『ミコ寄せ』をやるらしいよ！」

と、麻里子ちゃんは悪戯っぽく笑った。ちなみにミコ寄せとは、この街に伝わる唯一の怪談だ。

どのような物かは、殆ど誰にも分からないのである。ただ、言え

るのは「危ない儀式」だと言う事だ

聞いたうわさによると、ミコ寄せを行った人は全員死亡しているらしい。警察は犯人を未だに追跡しているが、全然見つからないとなり打ち切りに。でも、ミコ寄せを行ったものは・・・一度に一人の人間を呪い殺せると言うのだ。麻里子ちゃんの話によると、最近いじめが多発していて・・・その首謀者である「松山智司」まつやまさとしを呪い殺してもらうらしい。最近は暇なので、面白半分に麻里子ちゃんと約束をし・・・そして当日を迎えたのだった。

第一話

（市立美術館）

こうして、私と麻里子ちゃん、淳介に拓也の四人は美術館に行った。子供は入場料が無料なので、小学生の私達にはもって来いの場所である。ふと、私は思った……

「ねえ、そう言えば……如何して美術館なの？」

と、私は淳介に聞いてみた。ミコ寄せの儀式はあまり知らないが、淳介は「美術館」と指定したのだ。何かあるに違いないと思ったのだ

「ああ、別に学校でも良いけど……ほら、この美術館って何個か怪談があるだろ？ そう言う場所の方が成功しやすいかな……ってな」

「怪談？ そんなのあったっけ？」

「ああ、詳しくは知らないが……」

「へえ……」

取り敢えず、納得する。私はあまり詳しくない事だし、信じてもないし興味も無かった。

「そう言えば……如何して淳介君はミコ寄せの方法を知ってるの？」

そう言えば……と、私は思った。ミコ寄せの儀式は誰も知らないはずなのだ……学校の図書室で少し読んだが、その儀式は明治時代からあったらしい。当時を知っているお祖母ちゃんにも訊ねても、「知らない」の一点張りだったのだ。

「ああ、部屋を整理していたら古新聞が見つかったな？ 良く見たらミコ寄せの儀式の方法がのってたんだよ」

そう言うと淳介は古新聞を見せた。内容はこうだった……

昭和60年8月19日に児童殺人事件があった。しかし、それはいくつかの不審な点がある。5人の死亡推定時刻はたったの10分間で、しかも発見者によると遺体は何もないところから「現れた」と何人もの人が証言したのだ。警察は変質者の仕業と見て捜査を続けているが、犯人は未だに逃走中なのである。

また、うわさであるが・・・その児童たちは「ミコ寄せ」と言う儀式をしていたらしい。内容は殆どの人は口を閉じていたが、一人の女性からその内容を聞くことが出来た。

1、紙の上、下、左、右の四方に人型を書く。そして紙の中心に大きな鳥居を書く

2、二人以上でその紙を囲み、心の中で呪いたい人物の名前を儀式の参加人数分唱える。

3、言い終わったら、皆でその紙を十字型に鎌で千切り水に流す（川が良いが、トイレでも風呂場でも可）

注意：唱える回数を間違えたり、水に流しきらなかったり、千切る時、鎌で千切らなかつたり、左右に書いた人型の首、上下に書いた人型の頭と胴体を切らなかつたりしたら失敗してしまうので要注意

「そう言えば・・・前にもこんな事件があったよね」

「ねえ・・・やめようよ」

「麻里子・・・お前怖いのか？」

「ち・・・違うけどさ・・・」

たしかに、麻里子ちゃんの気持ちも分かる。少し気味が悪いし、現に殺人事件が起きているのだ。

麻里子ちゃんは退き気味であったが、私たちはトイレに向かった・・・

第二話

私達は、美術館のトイレの前に来た。しかし、淳介達が女子トイレに入るわけも、私達が男子トイレに入るのも、物凄く抵抗があったので「障害者用のトイレ」にみんなが入る事にした。全員が入り終わるのを確認すると、拓也はドアをしめて鍵を掛ける。もちろん、誰も入って来れないようにするためだ。それを確認するや否や、淳介は黙々と準備を進めていた。鞆から草刈用の鎌と、油性ペンを取りだして床の上に紙を置き、しゃがみこむ様に紙の上、下、左、右の四方に人型を書いた。そして緊張しているのか、少し呼吸が荒かったが、気にせず淳介は紙の中心に大きな鳥居を書いた。

「よし…準備できたぞ」

「んじゃ、皆でこの紙を囲んで？」

淳介が紙を拓也に渡すと、指示が出た。私達はそれに従って、その紙を囲んだ。

「じゃ、4回『松山智司』まつやまたかしって唱えるんだぞ？良いな？」

「わ、分かった」

麻里子ちゃんは、少し緊張しているのか…ワクワクしているのか、声が少し震えていた。そして、皆で心の中でその、呪いたい人物の名前を儀式の参加人数分唱えた。

「言い終わったか？」

「はやくして…もう一回言っちゃいそう」

「お、おう…」

拓也が全員の終了を認めると、出してあった草刈用の鎌で横半分まで切る。次に淳介がもう横半分を切ったので、紙が真っ二つになった。そして、麻里子ちゃんが縦半分に切ったら…私に鎌を渡してきた。私は少々呆れ気味に、渡された鎌でもう縦半分を切ったので、紙が四等分になった。一応使うかもしれないと思ったので、鎌は洗面器のところにおいて置いた。

「んじゃ、流すぞ？　これが終わったら儀式は終了だな……」

そう言うと、淳介は便器に近寄り「紙」をよく見ていた。恐らく、左右に書いた人型の首、上下に書いた人型の頭と胴体を切つてあるか確認しているのだろう。

異常は無かつたらしく、紙をトイレットペーパーで包み、大の方を捻つて流した。

ジャー……　つと言う音が静寂を支配した。私は子供らしくてやつてられない……　つと思つているので怖くなかったが、皆はゴクリと唾を飲み込んでいた。　数分静寂が続いたのだろうか？　淳介が動き出す。

「なんだ……　やっぱり迷信だったんだ。んじゃ、出ようぜ？」

そう言つて鎌とペンを片付けをしてから、ドアを開ける。少し残念だったね……　つと苦笑し合う。私はこうなる事を予想していたので、どうも思わなかった。

そうして、私達はトイレを後にするのだったが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071y/>

シャングリラ

2011年12月5日19時46分発行